

片恋スウィートギミック

Yuka & Akira

綾瀬麻結

Mayu Ayase



エタニティ文庫

目次

片恋スウィートギミック

5

書き下ろし番外編

淫靡なスウィートゲーム〜君のすべてが愛しくて〜

325

片恋スウィートギミック

一

会社の窓から望む空は、いつ雨が降り出してもおかしくないほどの鉛色の雲で覆われている。

七月に入ったとはいえ、今年の梅雨明けはまだ先になりそうだ。それはつまり、もうしばらくじめじめする湿気と付き合わなければならぬということ。
 どんよりした鈍色を目にするだけで、やる気がどんどん失せていく。

「……はあ」

今年三十歳になる鳴海優花は、セミロングの髪を撫でながら小さく息をつき、パソコン画面に視線を戻した。仕事に集中しなければと思うのに、目がチカチカし、作業が進まない。

これでは、絶対に入力ミスをしてしまう。

退社時刻が迫っているのもあり、優花は区切りのいいところで手を止めた。そして蛍光ピンクの付箋紙を取り出し、経費書類、至急と書き入れる。外回りに出ている社

員のデスクへ行き、それをパソコン画面に貼り付けて回った。

優花は、中小企業の広告宣伝を請け負う、広報戦略会社で働いている。社長は元々大手広告代理店に勤めていたが、自社商品の宣伝に苦戦する会社の助けがしたいと独立し、この会社を設立した。

社員は、社長を含めてわずか十人。女性は四十代の川上の他には優花しかおらず、この二人で事務を担っている。少数で仕事を回すのはとても大変だが、優花は社員同士が手を携えて支え合うこの会社が大好きだった。

「あつ、俺も請求し忘れてた……」

優花が付箋紙を貼る姿に目を留めた社員の一人が、顔を上げる。

「なるべく早く出してくださいね」

そう言いながら、優花は目の下に薄らとクマを作る彼の顔を見た。今取り掛かっている仕事が忙しいのだろう。難しい顔をしつつも、クライアントにとって何が一番いい方法なのかと、資料とにらめっこしている。

定時で上がる優花や川上と違い、広報の仕事をする彼らにすれば、就業時間はあつてないようなもの。もし今日も残業する様子なら、退社前にコーヒを淹れてあげよう。

仕事の中の他の社員たちの分も——と、優花が自分のデスクへ戻ろうとしたその時だった。

「なんだって!？」

突然、社長が大声を上げた。社内には響き渡るその声に、優花は部屋の隅に設えられた社長のデスクに目をやる。社長は顔を青ざめさせて、携帯から聞こえる相手の声に耳を傾けていた。

「それで、容態は! ……うむ、……そう、か。……良かった」

張り詰めていた社長の頬が、ふっと緩む。そして、少し離れた位置にいる優花にも聞こえるほどの安堵の息を零した。とはいえ、その目にはまだ何かを心配するような光が宿っている。

しばらく会話を続けたあと、社長は携帯をデスクに置いて顔を上げた。

「皆、聞いてくれ」

社長の声に、社内にいる社員全員が彼のデスクに集まる。

「たった今、専務から連絡が入った。彼と一緒にクライアントのもとへ行っていた三井が、交通事故に遭ったらしい」

告げられた内容に、皆息を呑む。社長の次の言葉を待ち、誰も声を発しない。社長は小さく頷き「三井の命に、別状はない」と続けた。

「良かった……」

社員一同、胸を撫で下ろす。優花も、隣に立つ川上と安堵の笑みを交わした。

「だが、脚を骨折したそうだ。折れた箇所が悪く、手術後のリハビリに時間がかかるらしい。そこは主治医との話になるから、今はまだ何も言えないんだが……」

社長は一旦口を閉じ、目を泳がせる。でもすぐに咳払いを一つし、社員を見回した。

「皆も知ってのとおり、三井が受け持っている仕事はかなりある。現在進行形のものもあれば、これから契約を詰める予定のものもある。君たちも、今請け負っている仕事で手一杯だと思いが、三井が復帰するまでの間、彼の仕事を振り分けさせてほしい」

「当然ですよ、社長。社員は家族同然。困っている時はお互いさまです。俺たちで、なんとか乗り切りましょう!」

四十代の主任が、すぐに答える。そして彼に賛同する社員たちが、次々に「頑張ります!」と声を上げた。

「ありがとう。ではまず、三井のスケジュールを確認しよう。デスクに置いてある予定表を持ってきてくれ」

社長の言葉に、一番の若手社員が反応する。ファイルを手にとり取って返し、男性社員たちで話し合いを始めた。

「あたしたちは、これまで以上に、彼らをサポートしなきゃね」

先輩の川上に言われて、優花は力強く頷いた。

事務員の優花たちは、広報の仕事に関しては素人で、まったく役に立てない。その代

わり、仲間たちが会社へ戻ってきた時に、ホッと肩の力が抜ける場所を整えよう。領収書などの提出が遅れても、大目にみればいい。仕事が増えた分は、先輩と分け合えなるとかなる。

彼らの負担を減らすには、自分たちも頑張らなければ！

「とは言っても、あたしたちが今できることってないよね。とりあえず、皆にお茶でも淹れようか」

「そうですね。わたしも手伝います」

優花は、川上と一緒に給湯室へ向かおうとする。だが、一歩足を踏み出したところで「嗚海！」と呼び止められた。振り返ると、そこにいる全員目が優花に注がれていた。

「あ、あの……わたし、ですか？」

「そう、お前」

呼ばれたら早くこっちへ来いと言わんばかりに、主任が優花に手招きする。

「お茶はあたしが淹れるから、嗚海さんはいってらっしゃい」

川上に背を押され、優花は社長たちの方へ歩き出す。ただ、いったい何の用事で呼ばれているのか見当がつかないせいで足取りが重くなる。

「な、な、なんでしようか」

逃げ出したい衝動に駆られるが、必死に堪えて訊ねた。

「社長、どうでしょう。嗚海は事務職ですが、常識と非常識の区別はつく大人です。彼女はもう三十歳ですし——」

「まだ二十九歳です！」

優花は思わず主任の言葉を遮り、年齢を訂正してしまう。ハツとした時は遅く、男性社員たちがぐすくすと声を零した。その笑いに、優花の頬がみるみる熱くなる。たまたらず手の甲で口を覆い、羞恥を隠す。

「女性にとって、年齢は禁句なんです。デリケートなんです！ それぐらい察してください」

「と、思ったことをすぐに口に出してしまっ、年齢のわりに些か子どもっぽいところもある嗚海ですが、その気概は買ってほしいと思います。それに——」

「しゅ、主任！」

優花の抗議を主任は一笑に付す。

自分の評価を社員たちの前で言い続けるのは勘弁してほしい。優花は止めようとするが、主任は優花を無視し、社長に真摯な目を向ける。

「意外と時間の融通が利くでしょう。またイベントの件ですが、私を含めた他の社員は、別件で既に埋まっています。川上さんには小さなお子さんがいるので、さすがに難しい。軀が空いているのは嗚海しかいません。彼女に任せてみてほしいと思うんですが、どう

でしようか」

時間の融通が利くって何？ 仕事を任せる？ それって……わたしにですか！ ——と声を上げたいのに、場の雰囲気がそうさせない。社長と主任は真面目な顔つきをし、他の社員たちは上司の邪魔にならないよう誰も口を挟もうとしないからだ。何がどうなっているのか、まったく状況を把握できず、優花一人だけがおろおろしていたその時、急に雨が降り始めた。雨脚はだんだん強くなり、窓に叩きつける雫が滝のように流れ落ちていく。

優花の不安を掻き立てるその天気にも、ぶるつと身震いが起きたまさに瞬間。

「よし、鳴海に任せよう！」

ずっと口を閉じていた社長が声を上げた。

「な、何を任せるって言うんですか？」

優花の口から、泣き声に似た声が漏れた。嫌な予感に、たまらず主任の袖をきつく引つ張る。しかし彼は営業スマイルを顔に張り付けて、意味ありげに優花を見つめた。

「何って……仕事に決まってるだろ？ 社員が大変な時、俺たちが助け合うのは当然だ。鳴海にも、三井が受け持っていた仕事を振り分けさせてもらおう」

振り分ける？ 事務職の経験しかないのに、広報の仕事を！

「む、無理です！ 皆さん、ご存知ですよね？ わたしが事務員だというのを。それ

なのに、いきなり他の仕事をできるはずありません！ しかも、三井さんの仕事なんて……。スケジュールの調整など、そういう内容なら頑張りますから」

「その点は大丈夫。広報の仕事とは言っても、新しい契約を取ってこいと言ってるんじゃない。鳴海にしてほしいのは、番組内容のチェックだけだ」

「……はい？」

「誰か、三井のデスクにある概要ファイルを持ってきてくれ。鳴海に回す仕事の分だけで構わない」

主任の声は耳に入ってくる。だが優花は、その内容を上手く把握できないでいた。

優花は大学卒業後、一度郷里に戻り仕事に就いた。しかし数年後東京へ出てきて、この会社に就職した。ここでは、川上が取引関係の書類を、優花が経理関係を主に受け持っている。

そんな優花に、広報の最前線で頑張る男性社員と肩を並べる仕事ができるわけがない。

「主任、わたしには無理——」

「はい、これ」

ファイリングされた資料を、主任が優花の手に押し付ける。優花は咄嗟にそれを受け取るものの、ハッとなって顔を上げた。彼は優花と目が合うなり、両手を背後に回して知らん顔をする。

「うちのクライアントが、ラジオ番組のスポンサーになった。七月から九月までのワンクールと短い、夏にイベントが開催されることで、充分そこで自社製品の宣伝ができる」と踏んだためだ。鳴海には収録現場へ赴き、クライアントに代わって番組内容をチェックしてもらいたい」

途端、優花の胸に痛みが走った。主任の発した「ラジオ」という言葉に、過剰に反応してしまったせいだ。

心の奥に封印したはずの昔の記憶が、沸々と甦ってくる。

優花は過去の記憶を振り払い、主任を仰ぎ見た。

「ちょっと待ってください。番組内容を確認するだけなら、録音したデータをもらって、会社で確認すればいいんじゃないですか？」

なんとかその仕事から逃げたくて、優花は食い下がる。だが主任は、優花の言葉を一蹴した。

「何、ふざけたことを言ってるんだ。我々は、クライアントの不利益になるような真似は決してしてはならない。現場に居れば、間違った情報はすぐに訂正してもらえるだろ？ だから鳴海は、毎回収録現場に行ってチェックしろ。わかったか」

「……はい」

そう言われたら、もうぐうの音も出ない。優花は仕事を引き受ける旨を告げた。

新規の契約を取ってこいと言われなかっただけでも良しとしよう。それに、優花が集めなければいいのは番組内容のみ。それほど不安になる必要もない。

「よし、決まりだ。それでは、早速行ってくれ」

優花の手首を掴んで歩き出す主任。そんな彼に引っ張られて足を動かしつつ、彼の背に問いかける。

「早速、行く？ あの、それって、どういう意味——」

主任は優花のデスク前で止まり、引き出しからバッグを出すよう促す。

「主任？」

「こちらの事情で担当者が変わる旨は、俺が先方に連絡しておく。鳴海は、すぐに出発してくれ。実は、スポンサー権を取得した番組の収録が……十九時から始まるんだ。しかも、今回の収録は東京ではなく特別に横浜のスタジオで行われる」

優花は壁掛け時計に目をやる。針は十七時十分を指していた。会社から駅まで歩く距離、乗車時間と乗り換え時間などを簡単に頭の中で計算する。

「ギリギリじゃないですか！」

状況を把握していくうちに、優花の中で焦りが生じる。初対面の人と上手く仕事ができるかわからない不安も重なり、徐々に涙目になってきた。

優花はバッグを取り出し、そこに渡された仕事のファイルを突っ込む。そんな優花の

隣で、主任が気持ち悪いほどの笑みを浮かべて親指を立てた。

「大丈夫、鳴海なら時間までに辿り着けるさ」

優花は主任を睨み付けたが、主任の後ろにいた社長や他の社員が笑顔で手を振る。

「鳴海、お前なら必ずできる！ それは、お前でもできる仕事だ！」

「……行ってきます！」

投げやりに言うと、主任が「タクシーには乗るなよ。経費節減中だ」と一言。

「わかってます！」

もう、どうとでもなれ！

そんな気持ちを抱きながら、優花は会社を出た。外は大雨と吹き荒れる風のせいで、木々の枝が左右に大きく揺れている。まるで、優花の心を映し出しているかのようだった。

雨の中、優花は最寄り駅まで歩き、電車に乗った。帰宅ラッシュに引つ掛かって少し乗り換えに時間を要したが、これなら収録が始まる前には現場に到着できるだろう。

移動時間を利用し、優花は主任から受け取った資料に目を通す。

ラジオ番組のスポンサーになったクライアントは、タオル工場を営む小さな会社だ。夏のイベントで販売される番組グッズ制作に参加できるため、スポンサーになることを

決めたようだ。

そこに書いてあるとおり、契約を結んでいる間は、番組はスポンサーにとってマイナスになる発言はできない。それを確認するのは、事務経験しかない優花にもできる。主任が優花を「常識と非常識の区別はつく大人」と評したのは、この仕事を任せても大丈夫という意味だろう。

次に、新ラジオ番組「キミドキッ！」の概要を確認する。特に決まった内容を話すのではなく、パーソナリティが情勢に合ったトークを毎週繰り返していくというものだった。さらに、内容次第でゲストを呼び、視聴者の知らないドキッとする話題も届けられるらしい。

パーソナリティは、東京のラジオ放送局で活躍するベテランアナウンサー。場数を踏んでいるアナウンサーなら、こちらが心配しなくても上手く回してくれるはず。すべてマイク前に座る彼に任せていればいい。三ヶ月なんてあっという間だ。

「……うん、大丈夫」

自分にそう言い聞かせると、優花は資料をバッグに入れ、自分の私服姿に目をやった。リース地のキャミソール、胸元が開いたオーガンジー素材のチュニック、膝頭の見えるスカート、そしてハイヒールと、順番に見下ろす。

これとおかしくないところはない。ただ今日だけは、スーツを着てくれれば良かった

と思わずにはいられなかった。普通に、女性の通勤時に見られる姿ではあるが、今日初めて現場の人と会う恰好ではないのが、優花でもわかる。

どこかで店に寄り、安いスーツを買った方がいいだろうか。

その考えに惹かれなくてもいいが、即却下する。寄り道をすれば絶対に遅刻してしまう。それだけは絶対に避けなければならない。とどのつまり、この服装で行くしかないというわけだ。

がっくり肩を落として小さくため息を吐いた時、横浜駅到着のアナウンスが車内に流れた。優花は席を立つと、急いでホームに降りた。続いて乗り換えホームへ行き、電車に乗る。

数分後、改札を出た優花は、早足に目的地のビルを目指す。だが雨脚は強く、ビルに入った時は足元がびしょ濡れだった。

これで人に会うのは恥ずかしいが、収録時間前に到着する方が大事だと自分に言い聞かせ、急いで受付へ向かう。受付嬢に目的を告げて入室に必要なカードキーをもらい、エレベーターに乗った。

上昇する間、優花は雨で濡れた肌をハンカチで拭い、湿気で膨らんだ髪を手櫛で落착かせようと努力する。だがすぐにエレベーターは到着し、扉が左右に開いた。

ああ、遅かった——と肩を落として嘆息しつつ、ゆっくりエレベーターホールに出た。

「鳴海さんですか？」

その声に顔を上げる。ネームプレートを首に掛けた若い男性が、優花を目にするなり傍へ走り寄ってきた。

「はい、そうです！」

「お世話になります、私、キミドキッ！ スタッフの小林と言います」

「鳴海優花と申します。三井に代わって、担当させていただきます。現場に不慣れなせいで、いろいろとご迷惑をおかけすると思いますが、どうぞよろしく願います」

優花は緊張を隠せないまま挨拶する。それを感じ取ったのか、小林は優花の強張り（こわばり）を解くように頬を緩めた。

「こちらこそよろしく願います。収録スタジオへご案内しますね」

小林が廊下の奥を指す。優花は、彼に促されるまま一緒に歩き出した。

「三井さんのことですが、大変でしたね。御社からご連絡をいただいた時は、我々スタッフも驚きましたよ。……三井さんのお怪我、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。ただ残念ながら、しばらく入院生活が続くようでした……。現場に入らず、本当に申し訳ございません。三井の代わりとしてわたしも尽力しますので、何かあればどんどんおっしゃってください」

「そういう意気込みは、こちらとしても本当に有り難いです！ 一緒にいい番組を作り

上げていきましようね。……あつ、ここがコントロールルームです」

小林がドアの前で立ち止まり、カードキーを指定場所に接触させる。そして扉を押し開き、「どうぞ」と優花を室内へ促す。

「三井さんと代わられた、新しい担当の方が到着されました」

「失礼します！」

優花は頭を下げて、音響設備の整った部屋に入る。

「初めまして。前担当者の三井と代わることになりました、鳴海優花と申します。どうぞよろしくお願い——」

相手にいい印象を持つてもらおうと元気良く挨拶したまでにはいいが、そこにいるスタッフの一人を意識した途端、優花の声は小さくなり、最後には言葉が途切れてしまった。

「……な、んで？」

あまりのショックに、優花の営業スマイルが静かに解けていき、素の自分が現れる。そして、顔は強張り、唇はかすかに震え始めた。

仕事で人と接することに慣れていれば、すぐに表情を取り繕えたかもしれない。何事もなかったかのように誤魔化せたかもしれない。だが優花には、それは無理だった。

音響スタッフの隣に座る、黒色のチノパン、白いシャツ、その上に薄手のジャケット

を羽織った男性から目を逸らせない。

緩やかに波打つマッシュウルフカット、優しげな目元、黒々とした綺麗な双眸、真っすぐな鼻梁、そして薄いが柔らかそうな唇。記憶にある面影を少し残しつつ、大人の魅力あふれる男性へと変貌を遂げたその姿に、優花が必死に押し隠してきた感情が動き始める。

男性もまた、驚愕に満ちた目で優花を仰ぎ見ていた。だが、先に我に返った彼が立ち上がり、優花の方へ近づいてくる。

「ど、どうして……」

か細く震える優花の声は、シーンと静まり返るコントロールルームに響く。それを掻き消すほどの声量で、彼が「鳴海！」と自分の名前を呼んだ。記憶の奥深い部分にある懐かしいバリトンの声。それを耳にした瞬間、優花の心臓が高鳴った。

「まさか、こんなところで鳴海に会えるなんて思ってもみなかった！」

やにわに彼が両手を差し出し、親しげに優花の冷たい手を掴んだ。予想外の出来事に自分を律することができず、優花の軀がビクツとなる。

優花は現実に向き合いたくないとばかりに瞼を閉じるが、無理だった。冷たい手から伝わる彼の体温、記憶に残る声音に心を揺さぶられる。

逃げるのは不可能だと観念した優花は、ゆっくり目を開けた。

「た、小鳥遊……くん」

「そう、俺だよ。良かった……俺のこと、覚えてくれてたんだね」

小鳥遊は甘くかすれた声で言い、嬉しそうに微笑んだ。彼の態度は普通なのに、すべてに翻弄される。くすぐったいような疼き、雨で冷え切った軀の芯を駆け巡っていった。

大学を卒業して八年。その間、小鳥遊とは一度も会っていないのに、当時彼に抱いていた熱い想いがほんの数秒で甦った。同時に、彼との苦い思い出が、まるで昨日のこのように鮮明に脳裏に浮かぶ。

会いたかった、でも会いたくなかった小鳥遊との再会に、優花の胸の奥で困惑と喜びが渦巻き始める。

早く、小鳥遊くんの手を振り解きなさい！——と内なる声が囁く。なのに手足が痺れたように震えて力が入らない。

優花は小鳥遊を拒めないまま、その場に佇むほかなかった。

二

「実は鳴海とは、大学の同窓生なんです。しかも、同じサークルに入ってたんですよ」

小鳥遊が番組スタッフに告げたのは、ほんの数分前のこと。さらに、当時はとても親しくしていたと続けたため、スタッフたちの間に走っていた緊張が心なしか和らいだ。

それもそうだろう。いきなり親しげに握手すれば、誰だって何事かと思う。そんな小鳥遊の言葉に対し優花の反応が鈍かったせいで、二人の間に何かあったと勘ぐられてしまったようだ。

大人の対応を取れなかった優花が、全面的に悪い。それは理解している。でもこの状況にどう反応すればいいのかわからず、結果、優花は口籠もるしかできなかった。

パーソナリティの変更など資料に書かれていなかったのに。しかも、それが小鳥遊だなんて……

「あの……ご存知のように、今回の新番組ですけど、まずはワンクールという話なんです。でもパーソナリティが若い小鳥遊になったこともあって、俺たちは長く続く番組にしたいと考えていて……。最初の一ヶ月が勝負だと思っているので……その、頑張りますね！」

収録準備で小鳥遊が構成作家とラジオブースに入るなり、スタッフの小林が気を利かせて優花に話しかけてくる。優花はまだ落ち着きを取り戻せていないが、なんとか頬を緩めて彼に頷いた。

「はい……。わたしも、応援しています」

「スタンバイお願いします」

音響スタッフの言葉に、小鳥遊が頷く。

「はい、いきます。五、四、——」

ラジオ収録開始の合図が出され、番組のテーマとなるリズムカルな曲が流れた。コントロールルームにいるスタッフの緊張が高まる。それに対し、ラジオブースにいる小鳥遊は目を閉じ、まるで始まるその瞬間が楽しみでならないとばかりに口元をほころばせていた。

初めて見る小鳥遊の仕事風景に、目が釘付けになる。優花が息を詰めて彼を見つめていた時、彼がカッと目を見開いた。そこにふざけた色は一切ない。意志の強そうな光を宿し、彼はマイク横にあるレバーを動かした。

「小鳥遊が触っているあのレバーは、カフキーと言って、自分でマイクのスイッチを切り替えるものなんです」

優花は小林の説明に頷きながら、生き生きした表情をする小鳥遊をじっと見つめた。

「こんばんは！ 新番組、キミドキッ！が今夜から始まりました！ パーソナリティの小鳥遊彬です。第一回ということで、実はまだ手探り状態なんですよね。でも、リスナーの皆さんにドキッとしてもらえるような情報をお届けするとともに、ゲストもお呼

びして、これまで知られていなかった新たな部分を掘り起こしていこうと思っています。番組のトップバッターを飾ってくれるゲストの発表は、番組後半で！ どうぞ楽しみにしててくださいね」

小鳥遊は一度手元に置いてある原稿に目を落とし、ストップウォッチをちらっと見る。「ところで、実は今、とてもドキドキしてるんです！ もしかして、番組スタッフの仕業？ 初回というのもあって、俺を驚かそうとした!?」って思ってしまったくらいに」

くすくすと声を零した小鳥遊が、正面に座る構成作家ににやりとする。構成作家は何もしていないと首を横に振り、顔の前で手を交差した。

「あれ？ 構成作家が意味不明のバツ印を作ってるけど、それって言うなっってこと？ 知らないってこと？ でも俺……とてもテンションが高いんで暴露しますね！ 今、向こう側のブースには番組スタッフが数人いるんですけど、他にもう一人、仕事で来ている人がいるんです。その人はなんと、俺の大学時代の同窓生！ 八年ぶりの再会です！ ずっと音信不通だったんですよ。正直、奇跡としか思えない……」

そう言って、小鳥遊がコントロールルームにいる優花を見る。二人の視線がぶつかるや否や、彼はこちらが照れてしまうほど爽やかに微笑んだ。

「うわっ、小鳥遊さんって、あんな風に笑えるんだ。鳴海さんに会えて喜んでいるのが、こっちにまで伝わってくるよ」

優花は心の中で、それは違う、と頭を振る。
小鳥遊がああいう笑顔を見せるのは、自分にはない。相手を蕩けさせる笑みは、いつも優花の隣にいた女性に向けられていた。

男性の熱い視線を一身に浴びる、モデルのような美人の友人に……

その友人との距離を縮めたいがために、優花は小鳥遊に利用されていた。なのに、どうして当時と変わらない、にこやかな表情で優花を見るのだろうか。

「リスナーの皆さんの中で、最近ドキッとした話などがありましたら、是非番組までメールをお送りください。お待ちします」

複雑な思いに、胸の奥を掻きむしりたくなくなる。その一方で、小鳥遊のバリトンの声に、封印し続けた感情が呼び起こされて、そこが熱くなっていく。優花は、小鳥遊を見つめながら、遠い昔の記憶に思いを馳せていた。

——八年前、桜の香りをほのかに乗せた春風が、素肌を撫で始めた三月下旬。

大学の卒業式に出席していた優花は、キャンパス内にあるホールの席に、友人たちと一緒に座っていた。

この日の優花の装いは、薄いピンク色に花柄が舞う着物と、裾に白い小花模様が入った紺地の袴姿。髪型は、顔周りの髪をツイスト状に編んで柔らかいイメージを作り、片側は垂らしている。いつもの幼いイメージとは違い、優花を洗練された女性のように見せていた。

これなら自分に自信が持てるかも……

優花は数列前の席に男友達たちと座る、スーツ姿の小鳥遊を盗み見た。優花がこっそり想いを抱き続けた相手、そして卒業式後に告白を考えている男性だ。

小鳥遊と出会ったのは、優花が大学に入学してすぐの頃だった。

優花は引っ込み思案の性格をなんとか変えたくて、山々に囲まれた自然豊かな田舎を出て東京の大学に進んだ。だが、洗練された学生たちに気後れしてしまい、出だしから躓いてしまった。人の輪に入って行けずおろおろしていた時、初めて声をかけてくれたのが小鳥遊だったのだ。

「こんにちは。俺と同じ……新入生だよね？」

「は、はい」

「どこの学部？ ……って、手に持つてる封筒は文学部の？ もしかして、履修で困ってる？」

「あ、はい……」

それ以上答えられずにいると、優花の正面に座った小鳥遊が「何がわからない？ 登録の方法？」と話しかけてきた。

「はい。でもそれだけじゃなくて、最初に何を取ればいいのかも迷って……」

「わかる。俺も同じように躓いたんだ」

小鳥遊は外国語学部、優花は文学部で、そもそも学部が違う。にもかかわらず、彼は偶然傍を通りかかった別の文学部の学生に声をかけ、その人を引き入れて一緒に履修登録の仕方を教えてくれた。さらにキャンパス内ですれ違えば、声までかけてくれるようになった。

「もしかして、俺って鳴海の男友達第一号!? やった！ じゃ、携番とメアドの交換してほしいな」

大学に入って初めてした、異性との番号交換。

それでもなかなか自分から行動を起こせなかったが、小鳥遊が根気よく優花に接してくれたせいだろう。キャンパスで声をかけられても、優花は身構えずに彼の名を呼べるまでになった。

それから二週間ほど経った時、カフェテリアで空き時間を潰していた優花のもとに小鳥遊が来た。目の前に座るなり、彼は「俺と同じサークルに入らない?」と言った。

「旅行サークルなんだ。名ばかりの飲みサーかもしれないけど、俺、気の合う友達と一

緒に日本中のあちこちを見て回りたいんだよね。楽しそうだから……って、俺の話を知っている? 鳴海とも仲良くなりたいうって言ってるんだけど」

「わたし、と?」

「もちろん! キャンパス内で見かけるだけじゃ、俺寂しいよ。せっかくこうやって友達になれたんだから、もっと鳴海のことを知りたい。それにサークルに入れば、鳴海が仲良くしたいって思える友達ができるかも」

小鳥遊はテーブルに肘を置き、前屈みになって優花の目をじっと覗き込む。あまりにも真剣な眼差しに優花の心臓が早鐘を打ち始めた。だんだん呼吸も弾み、息苦しくなる。間近で見つめ合う距離に耐えられなくなり、優花は自分から顔を背ける。その直後、小鳥遊の気怠い吐息が耳に届いた。

嘘、呆れられた!?

優花は慌てふためいて小鳥遊に目を戻す。彼は仕方ないなとばかりに、優しげに目を細めた。

「鳴海はさ、俺と一緒に——」

「優花?」

小鳥遊が何か言いかけた時、それを遮るように女性の声が響く。現れたのは、同じ学部の宇都宮千穂だ。彼女は物珍しげに優花と小鳥遊を交互に見つめたあと、優花の隣

に腰をかけた。

「……千穂ちゃん？」

宇都宮は、将来のミスキャンパスだと囁かれていた。とても綺麗な女性だ。

本来なら、そんな宇都宮と冴えない優花に接点などできるはずはないが、彼女に講義の代返を頼まれたのが切っ掛けで知り合いになった。これまでは、会えば挨拶を交わすぐらいの関係だったのに、今回に限って、彼女はじっくりと話したいとばかりの体勢を取っている。そんな彼女に、優花は驚きを隠せなかった。

「ねえ、彼は誰？ あたしにも紹介してよ」

「あっ、ごめんなさい。彼は、外国語学部の小鳥遊彬さん。小鳥遊くん、彼女はわたしと同じ文学部の宇都宮千穂ちゃん」

「こんにちは！ 宇都宮千穂っていいです。まさか、優花に学部違いの男友達がいるなんて知らなかったです。小鳥遊くん、これからはあたしとも仲良くしてくださいね」

宇都宮が可愛らしく微笑むと、彼も頬を緩めて「こちらこそよろしく、宇都宮さん」と返事する。だが、宇都宮はすかさず顔の前で手を左右に振った。

「あたしのは、千穂って呼んでください。宇都宮って言うと、どうしても餃子を連想する人が多くつて。別に嫌いじゃないんですよ！ 好きですけど、毎回、餃子の消費量が多いところ？ って訊かれるんです。正直、それに答えるのが面倒で……」

肩を凍める宇都宮を見て、小鳥遊がぶつと噴き出した。

「オーケー。わかったよ。……鳴海の友達、面白いね」

友達？ わたしと千穂ちゃんが？ ——と一瞬驚くものの、名字ではなく名前で呼び合っているならば、それはもう友達なのかもしれない。何故なら、宇都宮が優花に二回目の代返を頼んできた時、彼女の方から名前で呼んでほしいと親しげに言ってきたからだ。

宇都宮は、優花ともっと仲良くしたいと思ってくれているのだろう。そんな彼女の気が持ちが嬉しくなつて、優花の口元が自然と緩んだ。

「う、うん」

「それならさ、彼女も誘えば？ 友達と一緒にならさ、鳴海も気が楽になるんじゃないかな？」

「えっ？ ……何の話!？」

宇都宮が、優花と小鳥遊の話に割って入ってきた。すると、彼の目がついと彼女に向けられる。彼女を見る楽しげな目つきが、無性に優花の心をざわつかせた。

「鳴海にさ、俺と一緒に旅行サークルに入らないかって誘ってたんだ。良かったら君も一緒に入らない？ 旅行に興味があれば……だけど」

「入りたい！ あたし、旅行が大好きなんです！ ねえ、優花……あたしと一緒に旅行サークルに入ろうよ。優花と一緒になら、絶対に楽しめると思う」

宇都宮が親しげに優花の腕を掴み、甘えるように引つ張った。なのに、優花は上手く笑顔を作れなかった。せつかく友達になつてくれた宇都宮とはこれからも仲良くしていきたいと思うのに、理由もわからないまま嫌な態度を取つてしまふようになる。

それではダメだ！

優花は込み上げる感情を振り払い、なるべく自然に見えるように作り笑いを浮かべた。

「……千穂ちゃんがそう言ってくれるのなら、入ろう、かな」

「本当!? やったー!」

宇都宮の喜びを目の当たりにしても、優花の胸の奥で渦巻くもやもやした感覚は消えない。その意味を突き詰めようとした時、小鳥遊が身動きをした。

優花が小鳥遊を見ると、彼は本当に嬉しそうに頬を緩ませていた。

「楽しみだね、嗚海」

「……うん」

小鳥遊と宇都宮は、優花と友達になつてくれた。そんな二人と一緒に、優花は勇気を出して一歩前に踏み出したのだった。

それからの四年間は、本当に楽しかった。少しずつだが友達も増え、いろいろな話ができるまでになった。一人でいても、いつの間にか小鳥遊が傍へ来てくれ、そこに宇都

宮が加わり、笑いの絶えない時間を過ごすことができた。

そして、卒業式まで残り一ヶ月となったある日。

優花はサークルの飲み会に参加した。仲間と楽しく過ごすのももう終わりだと思ふと切なくて、いつもより飲み過ぎてしまった。優花が外で火照つた顔を冷ましていると、小鳥遊も居酒屋を出てきて自然と優花の隣に立った。

「嗚海……大学入学時とは比べ物にならないほど、明るくなったね」

「あまり自分ではわからないけど……、うん、やっぱり変わったのかな。だって、四年前にもう一度戻してあげようなんて言われたら、絶対に嫌って思うもの」

これまで小鳥遊と育んできた、いろいろな感情まで失うのは辛過ぎる。それほど彼と過ごした時間は、優花にとって大切なものとなつていた。

特に、小鳥遊から就職の悩みを打ち明けられた日のことは忘れられない。

あれは、大学二回生の夏。サークル活動で宮古島へ行った時だった。優花が一人で夜の浜辺に座っていると、小鳥遊が隣に腰を下ろした。そして満天の星の下で、俺、ラジオのアナウンサーになりたいんだと告白してくれたのだ。

「そんなの無理だって、嗚海は笑う?」

『どうして? 小鳥遊くんはわたしに笑ってほしいの? 違うよね? ……わたし、応援するよ。だって、小鳥遊くんにはやりたいって思う仕事があるんだもの。それに向

かって頑張っしてほしい』

『鳴海……』

『わたし、前を向いて頑張る小鳥遊くんをずっと応援していたい。ダメ、かな？』

膝を両腕でギュッと抱き、静かに横を見る。胡坐かたまりを組んで座る小鳥遊も、優花に顔を向けていた。

『ありがとう。俺、頑張ってみるよ。……鳴海にはずっとこの先も応援してもらいたいから』

その言葉に含まれる一つ一つに、何か特別な想いを込めて囁ささやいてくれた感じがして、優花はとても嬉しかったのだ。

優花は宮古島でのことを思い出しながら、その後見事にラジオ放送局の試験を勝ち抜いた、未来のアナウンサーを見上げる。

「小鳥遊くんは、四年前とあまり変わらないね」

「うん変わらない。変わったら困るよ。でも、俺の心の奥にある秘めた核は変化してる。小さく淡い色合いだったものが、徐々に色濃く染まり、今は……それがかなり大きくなってきてるんだ」

「何それ……。意味わからないよ」

情熱的に話す小鳥遊に、優花はわざとおちゃらける。でも優花の頬はアルコールで赤

らんだ色とは違う、また別の感情で生まれた熱が広がり始めていた。自分の意思では抑えられない拍動音が、耳の傍そばで大きく響く。たまらず手を上げ、顔にかかる髪を耳にかけて意識をどこかへ持っていこうとした。でもそうする前に、小鳥遊の手が優花の頬に触れた。

「……髪の毛、食べてる」

「あ、ありがとう」

小鳥遊は、いつもと変わらない態度で優花に接しているだけ。なのに、彼の指が頬に触れただけで、血が沸騰したかのように軀からだが熱くなっていった。

ああ、彼が好きでたまらない！

この四年間、ずっと秘めていた想いが爆発しそうになる。こんな自分を小鳥遊が好きになるはずがないとわかっている。だけど、卒業して離れてしまう前に、優花は自分の気持ちを彼に打ち明けたいと思うようになっていた。

「た、小鳥遊くん……」

「何？」

緊張で喉の奥が引き攣くっり、舌が上手く動かない。こんな状態で気持ちを告げると失敗しそうだが、いい雰囲気になっているこのチャンスを逃したくなかった。

勇気を持って恐る恐る顔を上げると、優花の言葉をじっと待つ小鳥遊と目が合う。そ

ここに宿る温かな光に魅了され、優花は心持ち彼の方へ身を乗り出す。

「あのね……、わたし——」

「ああ、小鳥遊、ここにいたんだ！」

突如現れたのは、同じサークルに所属する佐野大地だ。彼は小鳥遊と同じぐらい背が高く、精悍な顔をしている。彼が飲み会に出席するだけで、女子の集まる率が高くなると言われている。優花から見れば、佐野は少し男臭さが強い。苦手な部類の男子だが、その野性的な風貌が女子に人気があるのだろう。

「佐野、何？」

「あっ、店内で千穂が探してた。何か話があるみたい。行ってもらっても構わないか？」

「千穂が俺に？ いったいなんの用事なのか。わかったよ。じゃ、鳴海……またあとで」

「うん、また……」

手を上げて、小鳥遊を送り出す。優花は頬を火照らせたまま店内へ戻るのははばかりだったので、ある程度の熱を冷ましてから店内に戻った。

それ以降も小鳥遊に告白できず、時間だけが経っていった。

そして今日、卒業式を迎えた。でも、告白のチャンスはまだ残っている。

「卒業生、退場！」

執行部の合図で、卒業生が順番にホールを出ていく。優花が出るまで三十分以上かかったが、小鳥遊と数列しか離れていなかったため、外に出ればすぐに見つけられるだろう。

そう安易に考えていたのが間違いだった。ホールの外は、艶やかな袴やスーツを着た卒業生が入り乱れていて、小鳥遊の姿を見つけられない。

「優花、写真撮ろうよ！」

「う、うん」

友達に誘われて、皆で写真を撮り合う。優花にとつて、彼女たちと過ごした大学生活は宝物と言える。でもそれ以上に優花の心で輝いているのは、小鳥遊の存在だ。彼が最初に声をかけてくれなければ、自分のペースで前を向いていけばいいと背を押してくれなければ、今の優花は存在しなかった。

優花の大学生活に鮮やかな色を添えてくれた小鳥遊に礼を言って、これまで胸に秘めてきた想いを伝えたい。

「ごめんね。わたし……ちょっと人を探してくる！」

優花は友達に謝ると、ホールの周辺に重点をおいて、小鳥遊を探した。だが、どこにも彼の姿は見当たらない。携帯で連絡を取ろうとしても、電源が入っていないというアナウンスが流れるのみ。

「小鳥遊くん……どこ？」

学部棟へ行ったのだろうか。それともカフェテリアで、友達とお茶でもしてる？ 踵を返したその刹那、優花は誰かに力強く手首を掴まれた。

びっくりして振り返ったそこには、佐野がいた。

「そんなに慌ててどうした？ ……もしかして、誰か探してるとか？ ……千穂？」

「あつ、ううん。千穂ちゃんじゃなくて、小鳥遊くん」

「ああ、小鳥遊？ 確か、カフェテリアの裏手にある中庭に向かって歩いてたけど」

カフェテリアの裏手？ どうしてそんな人気のない場所へ？

「一人だった？」

「ああ。サークルの仲間たちと写真撮らないかと、声をかけようとしたんだ。でもあいつ、凄く真面目な顔をしてさ。……邪魔しちゃ悪いなと思って。鳴海、小鳥遊に用があるんだよね？ じゃあ、ついでに呼んできてくれよ。皆とホール前で待ってるから」

「わかった！ 教えてくれてありがとね」

優花は佐野に手を振って、カフェテリアのある棟へ向かった。

そこにも卒業生がいて、友達同士で写真を撮ってはキャッキヤと楽しそうに騒いでいる。他の輪の中心には、照れる女性と嬉しそうに笑う男性がいた。周囲の友人たちから「おめでとー！」と祝福の聲が上がる。どちらかが告白して、上手くいったのだろう。

素敵な光景に目を輝かせながら、優花は小振袖を揺らして走った。ただ履きなれない草履のせいで、鼻緒に引つ掛かる親指と人差し指の付け根が痛くなる。

「……痛つ。ちよつと無理し過ぎたかな」

痛みのある部分に鼻緒を食い込ませないよう、踵を少し後ろに引く。草履を引き摺って歩き、石畳を通って中庭を覗いた。佐野が言ったとおり、そこに小鳥遊がいた。

「たかな——」

優花は小鳥遊の名を呼ぼうとするが、途中で声が小さくなっていく。ほかし刺繍の入ったエンジ色の袴に、色鮮やかな大輪の花が彩る着物姿の宇都宮が、彼を仰ぎ見ていたからだ。

優花は思わず建物の陰に身を隠した。二人が醸し出す親密そうな雰囲気、胸を締め付ける痛みに襲われる。優花はそこに手を置いて、苦痛を和らげようとした。

ねえ、どうして二人でいるの？ 何故こっそり会ってるの？ —— 声に出せない想いを心の中で呟く。

「……小鳥遊くんが好きなの」

ふいに、宇都宮の可愛らしい声音が、風に乗って優花の耳に届いた。木々の揺れる音で次に何を言ったのか聞き取れなくなるが、ほどなくしてまた彼女の聲が聞こえ始めた。「サークルに入った時から、あなたがずっと好きだった。あたしと付き合ってくれませ

んか?」

ミスキャンパスに選ばれた宇都宮が、小鳥遊をずっと好きだった!?

「告白してくれてありがとう。でも——」

小鳥遊の落ち着いた声が聞こえる。優花はゆっくり身動きして、中庭にいる小鳥遊たちを覗き見た。

「まず、俺の気持ちを聞いてくれないか。千穂、俺も……好きなんだ。……四年間、ずっと見つめてきたんだよ。だからこのあと——」

瞬間、宇都宮が小鳥遊に抱きついた。彼女の気持ちを受け入れるように、彼の両腕が彼女の背に回される。

「ほん、とう……なのね?」

「ああ。俺の気持ちに嘘偽りはないよ」

二人の顔は見えない。会話も途切れ途切れにしか聞き取れなかったが、それでも、お互いがずっと胸に秘めていた想いを通じ合わせたのは良くわかった。

優花は、シヨックを隠し切れなかった。小鳥遊とは付き合っていないが、心のどこかで自分は彼にとつて特別な女性だといつの間にか思い込んでいたせいだ。

小鳥遊はいつも優花の傍そばにいて、気にかけてくれて、皆の輪へ誘ってくれていたから……

でも、今わかった。あれは全部偽り。何もかも、宇都宮との距離を縮めるために小鳥遊がやっていたこと。

思えば、優花が宇都宮といると、不意に小鳥遊がやって来て、そのまま一緒にいるのが多かった。次第に優花そっちのけで話題に花を咲かせ、二人はとても楽しそうにしていた。時々優花にも話を振ってくれたが、彼女が彼の袖を引っ張れば、意識はすぐに宇都宮に戻る。何をするにしても、小鳥遊の眼差しは、宇都宮へと向けられていた。優花は上手く利用されてしまったのだ。

「わたし、何を浮かれてたのかな。バカみたい……」

込み上げてくる感情を抑え切れず、優花は涙を零こぼした。

その後、優花は誰にも会わずに大学をあとにし、その足で携帯を解約した。就職が決まっていた会社も一身上の理由で辞退し、アパートを解約し、実家に戻った。

卒業式を境に、優花は小鳥遊を含めた大学時代の友達全員と連絡を絶つたのだった。

「はい、オッケーです! お疲れさまでした!」

音響スタッフの声に続き、ラジオブースから聞こえる小鳥遊の「ありがとうございま

した」という声で、優花は我に返った。

「どうしよう！ 大学時代を思い出していたせいで、まったくラジオの内容を確認していなかった。ここには昔を思い出すために来たのではないのに、いったい何をしているのだろう。」

優花は、音響スタッフのもとへ慌てて駆け寄る。

「あの、今日収録した番組内容ですけど、データでいただけますか？」

「いいですよ。収録した音源データを送らせてもらおうとは思っていましたが。はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

音響スタッフから、収録データを移したUSBメモリを受け取った。ホツとしつつ振り返ると、スタッフたちが機敏に動いているのが目に入った。

「えっ？ あの……」

「貸スタジオなんで、時間内に出なきゃいけないんです。すみません、このあと、別番組の生放送があるので急いで移動しなければならなくて。三井さんには打ち合わせの時間にお伝えしていたんですが……」

番組プロデューサーが、優花に申し訳なさそうに伝える。

「いえ、こちらこそ何もわからずにすみません！ 次回は、きちんと勉強して参り

ます」

優花は恥ずかしく思いながらも、次の収録日には必ず挽回ばんかいすると決意した。

ふと我に返って周囲を見回すと、スタッフたちがコントロールルームの清掃を始めていた。優花も手伝うべきだと思ったが、何が触っていいものなのか、まったく見当がつかない。

おろおろしていると、ラジオブースから出てきた小鳥遊に名前を呼ばれた。

「何もしなくていいよ。機材類はスタッフが責任を持って片付けるから。それぞれ自分の仕事に誇りを持ってやってるんだ。鳴海もそれに慣れてって」

「あ、はい……」

優花は事務的に返事をした。先ほど鮮明に過去を思い出したため、まだ上手く心の整理ができない。

「鳴海、このあと……仕事の予定は？」

唇を強く引き結び、軽く俯うつむいて顔を隠す優花に、小鳥遊が話しかける。

「……ありませんけど」

「だったら、再会の記念に飲みに行かない？」

飲みみに？ ……えっ？ それって、わたし、と？ ——びっくりして、優花は小鳥遊

を仰ぎ見た。彼は大学時代と変わらない態度で、優花に優しい目を向けている。

「いいよね？ 積もる話もあるし」

「あ、あの——」

小鳥遊と二人きりになる覚悟はできていない。優花はどう言っても断ればいいのかかわからず、戸惑いも露に目を彷徨させた。

「じゃ、俺、鳴海と旧交を温めて来ますね」

優花が口籠もっているのと、小鳥遊が宣言した。スタップたちはそれを歓迎しているようで、早く行けとばかりに彼の背中を押す。

「ありがとうございます！ じゃ、お先に失礼します！」

元氣良く挨拶した小鳥遊は、優花に視線を戻し、あろうことか手を握ってきた。

「ほら、行くよ、鳴海」

小鳥遊に引つ張られて、優花はコントロールルームを出た。その後彼は何も言わず、長い廊下の先にあるエレベーターホールへ向かう。優花はそんな彼の背をこっそり見つけていたが、やがてその視線を自分の手を握る無骨な手に落とした。

たった一度だけ、その指でさりげなく頬に触られたことがある。あの時の小鳥遊には、今のような大胆さはなかった。こういう振る舞いができるのは、彼がこの数年の間に大人になったという意味だ。

いろいろな女性と経験をして……

それに比べて、優花はまったく成長していない。社会人になって大人の階段を一段上り、初めて付き合った彼氏と肌を重ねもしたが、性格は当時とほとんど変わっていないかった。

だけど唐突に、優花の中にそう思われたくないという衝動が生まれた。小鳥遊の知る大学時代とは違う、魅力的な大人の女性になったと見られたい。

いつもの優花なら、異性に触れられれば咄嗟に手を引いていた。でも今回は、あえて自分から手に力を込めて小鳥遊の手を握り返す。すると、彼の背が目に見えてわかるほどビクツとなった。

「……鳴海とこうしていられるなんて、不思議な感じだね」

小鳥遊が肩越しに優花を振り返る。でもその顔には、先ほどまでであった笑みはなかった。それどころか、初めて優花を見るかのような目つきをしている。

優花は小鳥遊に返事をしなかった。というか、口を開けられなかった。エレベーターの扉が開いて中へ促されるなり、彼に握られた手を外されたからだ。

小鳥遊にまず先に夕食を取ろうと誘われたが、それは断った。この状態で、普通に彼と食事ができるはずがない。それほどアルコールに強くないが、その力を借りて軀の強張りをほぐさなければどうにもならないと思うほど、優花の緊張は高まっていた。

それならばと小鳥遊が連れて行ってくれたのは、横浜にあるシティホテルのスカイバーだった。

「ここなら軽食も頼めるからいいと思つて。鳴海は大学時代よりも、お酒……強くなつた？ それとも、昔と同じくらい？」

「……たくさんの量は飲めない。昔と同じくらいかな」

「わかつた。じゃ、俺が鳴海の方も頼んでいい？」

「あの、はい……お任せします」

小鳥遊はカウンターの座ると、パーティーに合図を送る。

「彼女にはハイライフ、俺にはベルベット・ハンマー。夕食を取っていないので、適当に何か食べるものを見繕ってもらえないかな」

「はい。少々お待ちくださいませ」

バーへほとんど来たことがない優花は、物珍しさから、優雅な所作でシェイカーを振るパーティーングラスを眺める。でもこのまま口を噤んでいるのも居心地が悪く、優花は小鳥遊を窺った。

「……カクテルに詳しいのね」

「そうでもないよ。ただ……結構こういうシチュエーションを繰り返してきたかな」

それは、女性を頻繁にバーへ連れて行く機会があるという意味なのだろう。

大学を卒業して八年ともなれば、小鳥遊だっているいろと経験してきたはずだ。それは彼の慣れた女性への扱いでわかつていたのに、こうして決定的な言葉を聞くと、優花の胸に苦いものが生まれてしまう。

「お待たせいたしました」

優花の前には白っぽい液体が入ったカクテルグラス、小鳥遊の前にはコーヒー色の液体が入ったカクテルグラスが置かれた。さらに、ピンチョスの盛り合わせが並べられる。小さく切られたパンの上に、クリームチーズとスモークサーモン、アボカドと生ハムとオリーブがのっている。お腹は空いていなかったのに、彩りも鮮やかなオードブルを見ていると、優花の口腔に唾があふれてきた。

「じゃ、まず再会を祝して……乾杯」

小鳥遊に促され、優花はカクテルグラスを持ち上げた。グラス越しに、彼の強い眼差しが向けられる。それを直視できず、優花は視線を外した。

「乾杯」

そう囁き、小鳥遊とグラスを触れ合わせる。そして、逃げるようにグラスを口に運んだ。

カクテルを一口飲んだ瞬間、パイナップルのさっぱりとした風味が口の中に広がった。ついさつき小鳥遊と目を合わせないようにしたはずなのに、優花は思わず目を輝かせて彼を見てしまう。

「美味しい！」

そういう反応が返ってくるとわかっていたのか、小鳥遊は優花に顔を向けたまま目を細める。

「良かった、気に入ってくれたみたいで。ただアルコール度数は高いから、ゆっくり飲んで」

注意を受けるが、優花の飲むスピードは速くなる一方だ。美味しいのもあるが、緊張で舌が乾くせいで、自然と速度が上がってしまう。

グラスが空になると、小鳥遊が同じものをもう一杯頼んでくれた。

近況報告を兼ねて、たわいない話をしながらピンチョスを食べ、カクテルを一口、二

口と飲む。アルコールが程よく回ってきたのか、優花の中で張り詰めていた緊張の糸が緩まり始めた。少し気怠くもあるが、寧ろそれが心地いい。

優花がうっとりとして吐息を零した時、小鳥遊が手にしていたグラスをコースターに置いた。

「鳴海、……俺、鳴海にずっと訊きたいことがあったんだ」

「……何？」

「何故、卒業式を境に姿を消したんだ？」

不意をつかれて、優花の心臓が跳ね上がる。その件だけは触れられなくなかったのに、小鳥遊は無遠慮に優花の心に踏み込んできた。優花は目を逸らし、あの日の話はしたくないと暗に告げるが、彼は問答無用とばかりに優花に詰め寄る。

「サークルの仲間にも一言も告げず、掻き消えるように俺の前からいなくなったのはどうして？ 鳴海との関係は一生のものになると思ってた。でもそれは、俺が一方的に感じてただけだった？」

一生のもの？ 優花には、ほんの一片の想いさえ抱いていなかったのにな？

強い光を瞳に宿す小鳥遊に、優花は「嘘吐き！」と叫びたくなった。小鳥遊は宇都宮との距離を縮めるために、優花の心を利用した。それがショックだったので、すべての関係を絶って逃げたのだというのに。

でも優花は、その想いをぐっと胸の奥へ抑え込んだ。
 「偶然なの。別に……小鳥遊くんの前から消えたわけじゃない。携帯も……壊れて、誰とも連絡が取れなかっただけ」

何もないと肩を竦める。だが、小鳥遊は優花の言い訳を信用せず、軀からだを捻ひねって優花を凝視してきた。

「俺ね、この世界で頑張れば、絶対に俺の情報じょうほうが鳴海の耳に入ると思っていた。もちろん望んで入った職場だから、鳴海のためだけに努力したわけじゃないけど……。でも、その考えが頭にあったのは事実だ。なのに、鳴海はずっと連絡をくれなかったね。こうして偶然に再会しなければ、今もまだ俺に連絡をしようとは思ってくれなかったんだろ
 うな」

「……卒業してからもいろいろあって、昔を思い出す心の余裕なんてなかった。でもそれは、小鳥遊くんも同じでしょ?」

千穂ちゃんと付き合い始めたら、彼女が一番大事になって、わたしのことなんて思い出しもしなかったでしょ? ——優花はそう言いたい気持ちに、無理矢理蓋ふたをする。

「そうだな。鳴海の言うとおりで、新しい出会いや付き合いが増えていったよ。だからと
 いて鳴海を忘れたわけじゃない」

「わたしだって、同じよ。わたしの大学生活を色鮮いざもせやかにしてくれた……小鳥遊くんを、

そう簡単には忘れられなかった」

優花はカクテルグラスの細い脚を撫なでながら、小さくため息を吐ついた。

小鳥遊に言ったとおり、彼がいなければ優花の大学生活は灰色の四年間になっていたに違いない。優花が大学生活を語る際には、必ず彼が登場する。

それぐらい、優花の心の深い部分に彼の存在が根付いている。だからこそ好きな人
 利用されたのが悔しくて、悲しかった。

優花はカクテルグラスを持ち上げ、口元へ持つていく。

「鳴海……」

「何?」

「鳴海ってさ、今、特定の……その、彼氏はいる? 好きな人はいる?」

「……小鳥遊くんは?」

千穂ちゃんと今も続いているの? それとも、もう結婚とか? ——そう思っただけで、優花の胸に痛みが走った。それをアルコールで消したい一心で、残ったカクテルを一気に飲み干す。

「特定の相手はいないよ。俺は……ここ数年ずっと恋人はいない。駄目なんだ、誰と付き合っても、誰に好意を持たれても……昔みたいに、胸を熱く焦こがせない」

小鳥遊の告白に驚き、優花は彼を見つめた。

立ち読みサンプル はここまで